

『幼児の教育』にみる戦後のわが国における就学前音楽教育の変遷

長 澤 歩

(本講座大学院博士課程前期在学)

1 はじめに

就学前教育における音楽教育は、昭和23年の「音楽」と「リズム」から、昭和31年に領域「音楽リズム」へ、その後平成元年に領域「表現」へと移行する中で、『保育要領－幼児教育の手引き－』、『幼稚園教育要領』、および『保育所保育指針』に掲げられた目標や内容をもとに展開されてきた。しかし一応の目安は立てられているものの、その活動や指導法については、具体的に体系化、組織化されておらず、実践については各々の幼稚園、保育所に任されてきたために、全体的な問題として取り上げることが困難であった。そのために、戦前の就学前教育における音楽教育に関する史的研究は数多く存在しているが、戦後についての史的研究は少なく、ほとんど明らかにされていないのが現状である。したがって、本論文では雑誌『幼児の教育』を研究対象として、戦後から現在に至るまでの、就学前教育における音楽教育の変遷を明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

戦後、保育者を対象としたさまざまな雑誌が出版されたが、『幼児の教育』は、明治34年の創刊以来、現在もなお一貫した編集方針のもとに継続している唯一の雑誌である。また、日本最初の幼稚園と言われている東京女子高等師範学校附属幼稚園内にあった研究会「フレーベル会」(後の日本幼稚園協会)によって出版されており、先進的な内容であると考えられる。したがって、本研究では、『保育要領－幼児教育の手引き－』が刊行された昭和23年から現在までの『幼児の教育』を対象として、音楽に関する記事を取り上げ、『幼稚園教育要領』の改訂を区切りとした5つの時代ごとにその特徴を見出し、わが国の就学前教育における音楽教育の変遷を概観する。5つの時代とは、第1期：昭和23年から30年、第2期：昭和31年から38年、第3期：昭和39年から63年、第4期：平成元年から9年、第5期：平成10年以降、である。なお、音楽に関する記事については、タイトルと内容に音楽を含むものを抽出した。

3 『幼児の教育』にみる戦後の就学前教育における音楽教育の位置づけ

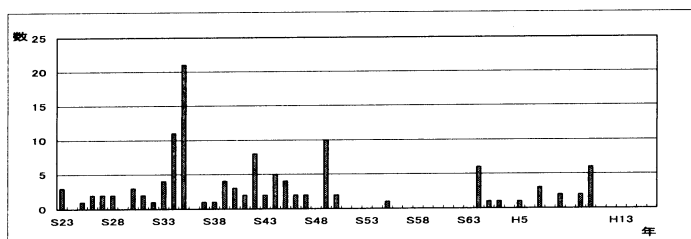


図1 『幼児の教育』にみられる音楽に関する記事数/年

図1は昭和23年(47巻)から平成15年(103巻)までの『幼児の教育』に掲載された音楽に関する記事数を年ごとに示したものである。全体の流れとしては、昭和49年まではほとんどすべての年に音楽に関する記事がみられるが、その後音楽に関する記事数は減少しており、皆無である年がめだつようになっている。しかし、昭和23年の『保育要領』の制定、昭和31年の『幼稚園教育要領』の制定、昭和39年、平成元

年、および平成10年の改訂を機に音楽に関する記事が増加していることが分かる。昭和34年に記事が集中しているのは、この年の6月号が音楽リズム特集号であったためである。これは、昭和31年の『幼稚園教育要領』制定により、「音楽」と「リズム」が1つにまとめられ、「音楽リズム」という新たな領域ができたことを受けての特集である。昭和39年の改訂後は、音楽に関して大きな改訂がなされなかったためか、記事の増加は見られないが、その後約10年間は高い頻度で音楽に関する記事が掲載されている。

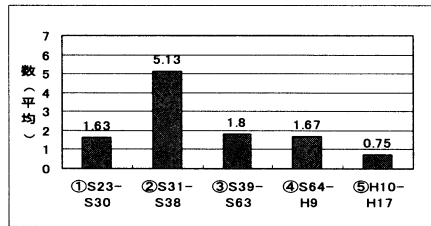


図2 『幼稚園教育要領』にもとづく時代ごとの『幼児の教育』にみる音楽に関する記事数の年ごとの平均

『幼稚園教育要領』の改訂を区切りとした時代区分で、音楽に関する記事数の平均をみると、②（昭和31-38年）の期間が最も多い（図2）。

「昭和27年頃から専門的研究が重視される時代に入りつつあった。保育研究の促進のため、実際家、幼稚園専門家、心理学者、教育学者等の協力による研究が求められていた。この雑誌が新しい保育研究の発表機関になるように今後特に熟考検討を要することが当時の編集会議で話された。」¹⁾ という津守の記述からも、②（昭和31-38年）の期間に幼児の音楽教育に関する研究も数多く行われていたことが推測できる。平成10年以降は、音楽に関する記事はほとんどみられない。領域「音楽リズム」が「表現」へと移行し、音楽という言葉が姿を消すと同時に、音楽教育に対する関心も薄れていったと言える。

4 戦後の『幼児の教育』に掲載された各時代の音楽に関する記事の特徴

① 第1期：昭和23年から昭和30年

表1は音楽に関する記事の一覧である。リズムに関する記事がめだつのは、昭和23年の『保育要領』において「リズム」が設けられたことによるためである。昭和31年の『幼稚園教育要領』改訂前にもかかわらず「音楽リズム」という言葉が使われているのは、昭和28年5月に文部省から『幼稚園のための指導書 音楽リズム』が発行されたためである。この指導書は、保育要領改訂委員会（『保育要領』が系統的組織性を欠いていることから、また「リズム」の内容を批判し検討を行う目的で昭和23年9月に設けられた）によって出版されたものである。『保育要領』が出された年に既に改訂委員会が設けられており、昭和28年以降に「音楽リズム」に関する記事がみられることから、指導書が発行されたことを機に、「音楽リズム」という言葉が使われはじめたと考えられる。

表1 昭和23年から昭和30年の『幼児の教育』に掲載された音楽に関する記事一覧

年	巻	号	音楽に関する記事	執筆者	所属機関	ページ	分類
1948	47	5	リズムと教育 (1)	小林宗作	厚生保母養成所長	pp.11-14	○
		6	リズムと教育 (2)	〃	〃	pp.10-14	○
		8	リズム遊び	副島ハマ	厚生省保育課	pp.10-14	□
1949	48		なし				
1950	49	9	幼児の音楽的発達	山下俊郎	東京家政大学	pp.4-6	○
1951	50	1	幼児のリズム指導	戸倉ハル	お茶の水女子大学	pp.28-31	□
		4	子どもの日の歌(教材)	倉橋惣三・戸倉ハル		pp.22-23	その他
1952	51	9	「音符遊び」について	小木曾光子	大阪基督教大学 附属聖愛幼稚園	pp.28-32	△
			幼児の音楽経験に於ける環境による機制について	水野久一郎	愛知学芸大学	pp.37-43	○
1953	52	9	音遊び	小木曾光子	大阪基督教大学 附属聖愛幼稚園	pp.45-47	△
		12	改訂された「音楽リズム指導書」にもとづいて	山村きよ	文京区立第一幼稚園	pp.19-23	△
1954	53		なし				
1955	54	3	幼児と音楽	山下俊郎	東京家政大学	pp.2-5	○
		11	《音楽リズム》かかし	堀合文子・村田修子・村井トミ	お茶の水女子大学 附属幼稚園	pp.31-32	△
			健康運動・音楽リズム(研究協議)	村田修子・平井信義・戸倉ハル		pp.48-51	その他

* 分類…音楽的能力を重視したものを○、その中でも遊び形式での基礎的指導を重視したものを△、創造性や自由表現を重視したものを□、で示した。

昭和23年から昭和30年の間に、『幼児の教育』において合計13点の音楽に関する記事がみられた。13点のうち、教材紹介および研究協議を除き、また連載記事をまとめて1点とカウントすると、就学前教育における音楽教育に関して書かれた記事は11点である。この11点の記事のうち、9点は幼児の音楽的な成長・発達を重視した音楽教育であった。純粋な正しい発達が遂げられなければならないことが意識されており、そのために、より専門的な内容の記事が多い。小林（1948）はダルクローズのリトミック⁷⁾を、山下（1950）はゲゼルの研究をとりあげて、音楽においても幼児の発達の段階に応じた保育を進めなくてはならないことを強調している⁸⁾。また、リズム指導に関して小木曾（1953）は、就学前教育における音楽教育は基礎から系統立てて指導しなければならないとしているが、遊びの形式で基礎的な指導を行っていかなければならないことを強調している⁹⁾。山村（1953）も同様に、いつも幼児の成長発達の段階に十分注意して、基本的なことがらを考慮しながら無理のない指導をしなければならないとしながらも、子どもにとって楽しい活動や遊びを取り入れた実際の指導例をあげている⁹⁾。

その一方で、残り2点の記事は自由表現や創造性を重視した音楽教育の立場をとっている。戸倉（1951）はリズム指導に関して、子どもの生活の中にある音楽を選び、その中から動きを見出ししていくことが大切であるとし、さらには「子どもたちに教えるのではなく、子どもがすでにもっているものを、たくみに引き出していくところにすべてのリズム指導がある。」⁶⁾と述べている。副島（1948）もまた幼児の自由意志と幼児の興味によって自由表現が行われるというところに教育的価値があるとして、「幼児にさせるリズム遊びは決して理論を教えたり、表現法を教えたりせずに、幼児が直接に事物を観察してその感じを表現するように指導しなければなりません。」⁷⁾と述べている。

以上のように、この年代にみられた就学前教育における音楽教育に関する記事は、ほとんどが音楽的成長・発達を重視したものであったが、対立的な立場にある自由表現や創造性を重視した考えも存在していることが明らかとなった。したがって、これ以降の年代においてもこの視点を中心に見ていくこととする。

② 第2期：昭和31年から昭和38年

昭和31年から昭和38年は、音楽に関する記事が最も多くみられた時代であり、音楽に関する記事が皆無であったのは昭和36年のみである。昭和31年に入り、それ以前にはみられなかった楽器あそび、器楽指導や楽器の工夫などの記事がめだつことから、この時代に幼児の器楽指導が盛んに取り上げられ研究されたことがわかる。昭和28年に発行された『幼稚園のための指導書 音楽リズム』の「I 序論」において、「音楽的経験やリズム表現の経験を発達させるためには、その機会の多いことと、多角的な練習がいちばん効果的である。したがって、今後の指導においては、単に歌だけでなく、器楽的指導の面も考慮しなければならないし、また、リズム遊びの面も用意しなければならない。」⁸⁾と記述されたことによる影響も大きいと考える。昭和35年以降からは旋律楽器も一部で登場しているが、この時代の器楽指導の場合、リズム指導がすべての音楽教育の基礎であるという考えのもとに、どの記事も打楽器を中心として書かれてある。

また、音感教育や才能教育が盛んに論じられ、音楽療法や音楽心理などというような新たな立場から音楽をとらえる研究が盛んになってきたようである。とりわけ、幼児期からの音感教育の重要性が説かれるようになり、早期教育という考え方が現場の保育者の間にも共通認識として存在していたことが、記事の内容からも分かる。それに伴って、保育者に、幼児の発達段階に合った簡単な曲を作曲する能力や、幼児の歌をより美しくより良いものとして聴かせたり歌わせたりするための伴奏づけの能力も求められるようになったために、作曲に関する記事も数多く取り上げられた。作曲についての内容は、和声の理論など専門的で難しい内容のものとなっている。また、小学校音楽科とのつながりの視点が記事の中にみられたり、評価に関する研究が存在する。このことは、昭和31年の『幼稚園教育要領』において小学校との一貫性が重視されたことの反映であり、領域というものを小学校の教科と同様な意味にとらえていたことがわかる。以上のことから、この時代は就学前教育において音楽的成長・発達や音楽的能力がより重視された時代であると言える。坂元（1963）は当時の保育現場の状況について、「「領域」に対する理解の浅さや、誤解からくる混乱が相当に各方面におこっている。極端なのは、1日の保育時間をそれぞれの領域に何分ずつあてたらいいか、といったことが大まじめに問題にされている。」⁹⁾と述べている。

表2 昭和31年から昭和38年の『幼児の教育』に掲載された音楽に関する記事一覧

年	巻	号	音楽に関する記事	執筆者	所属機関	ページ	分類	
1956	55	8	楽器あそび	村井トミ	お茶の水女子大学 附属幼稚園	pp.22-25	△	
		11	4歳児の器楽指導	堀合文子	〃	pp.32-33	△	
1957	56	9	幼児の音感教育	佃範夫・井上範子	香川大学・高松幼稚園	pp.53-55	○	
1958	57	4	保育の工夫 リズムを中心とした保育	松田嘉子	お茶の水女子大学 保育実習生	pp.50-53	□	
		6	幼児の歌ごころをよびますもの	相川ノブ子・谷口緑	和歌山信愛女子短期大学	pp.33-36	□	
		9	幼児と音感	井上範子・佃範夫	財団法人幼児研究所	p.30	○	
		10	保育者養成にあたって 音楽リズムの指導	村田修子	(保育者養成大学)	pp.37-39	その他	
1959	58	1	幼児のうたの作曲について	小林つや江	(大学)	pp.44-50	□	
		4	幼児のうたの作曲について	〃	〃	pp.34-41	□	
		5	作曲のヒント (1)	外山友子	〃	pp.32-35	○	
		6	作曲のヒント (2)	〃	〃	pp.24-26	□	
		7	幼児の音楽心理	堀越清	東邦音楽短期大学	pp.23-26	その他	
			作曲のヒント (3)	外山友子	(大学)	pp.44-47	○	
		8	作曲のヒント (4)	〃	〃	pp.38-42	○	
		10	作曲のヒント (5)	〃	〃	pp.39-41	○	
		11	作曲のヒント (6)	〃	〃	pp.56-59	○	
		12	幼児の音楽心理	桜林仁	東京芸術大学	pp.30-35	その他	
			作曲のヒント (7)	外山友子	(大学)	pp.49-53	○	
		1960	59	6	《音楽リズム特集号》			
	「音楽リズム」の成り立ちについて			坂元彦太郎	お茶の水女子大学	pp.2-5	その他	
	幼児の器楽指導について			酒田富治	酒田音感教育研究所・都立保母学院	pp.6-9	□	
	音楽と幼児との関係			松村康平	お茶の水女子大学	pp.10-13	その他	
	子どものたのしいリズムをもとめて			戸倉ハル	〃	pp.14-21	△	
	幼児の音楽療法			桜林仁	東京芸術大学	pp.22-25	その他	
	幼児の舞踏とその指導以前の問題			邦正美	舞踊家	pp.26-30	その他	
	幼児の音楽教育について—Kさんに答えて			美田節子	お茶の水女子大学	pp.31-35	△	
	幼児の音楽リズムの指導							
	3才児の音楽リズム			村石京子・富樫純子	お茶の水女子大学 附属幼稚園	pp.38-44	□	
	4才児の音楽リズム			関治子・村井トミ	〃	pp.45-52	△	
	5才児の音楽リズム			村田修子・堀合文子	〃	pp.53-61	△	
	洋書紹介 子どものための創造的リズムの動き				東京・あけぼの幼稚園	pp.62-64	その他	
	8			楽器の工夫について	志保田和子	聖和女子短期大学	pp.28-32	□
				音楽は楽しい治療です		U・S・S 提供	pp.33-35	その他
				幼稚園における音楽リズムの指導はどのようにあったらよいか—教育実践指導研究会協議会より—		お茶の水女子大学	pp.36-40	その他
	9			《日本保育学会第13回大会特集号》 Ⅲ芸術的領域に関する研究				
				日本人の音楽的才能と教育(4) (音楽教育の限界性と可能性に関する実証的解明)	山松質文	大阪市立大学	pp.18-19	○
				動きのリズムの評価に関する一研究 (幼稚園児を対象として)	橋本暢子 山松質文	大阪・普南幼稚園 大阪市立大学	pp.19-20	○
				幼児の音楽的感受性測定と旋律楽器の指導について (田中音楽素質診断テストにより)	松田美枝子	広島市吉島幼稚園	pp.20-21	○
	10			幼児の音楽心理	波多野完治	お茶の水女子大学	pp.2-5	その他
		楽器の工夫とその使用について	志保田和子	聖和女子短期大学	pp.38-44	□		
		幼児の音楽教育と評価(1) —指導者自身の評価について	山松質文	大阪市立大学	pp.45-49	○		
	11	幼児の音楽教育と評価(2) —音楽的才能の発達	〃	〃	pp.39-43	○		
1961	60		なし					
1962	61	9	子どもの音感教育の研究 その開始時期について	松平立行	大阪市立大学	pp.47-55	○	
1963	62	12	創造性をいかにした音楽指導	相馬誠子	(幼稚園)	pp.20-24	□	

* 分類…音楽的能力を重視したものを○、中でも遊び形式での基礎的指導を重視したものを△、創造性や自由表現を重視したものを□、で示した。

表2に示したとおり、昭和31年から昭和38年の間に音楽に関する記事は41点みられた。そのうち、歴史、『幼稚園教育要領』、教材・著書の紹介、研究協議、音楽心理や音楽療法などの保育現場における音楽教育に直接関係のない記事を除くと、就学前教育における音楽教育に関する記事は、実践記録や研究論文を含めて31点存在する。連載記事を1つとしてカウントすると実質記事の数は21点である。この21点の内容をみていくと、この時代においても音楽的な成長・発達や音楽的能力を重視した音楽教育と、自由表現を大切に、子どもの創造性を伸ばすことを重視した音楽教育の2つの対立的な考えが存在した。この2つの考えに大別した結果、21点のうち音楽的な成長・発達や音楽的能力を重視した音楽教育に該当したものは14点であり、自由表現を大切に、子どもの創造性を伸ばすことを重視した音楽教育は7点であった。なお、14点のうち7点は、遊びの形式で基礎的な指導を行っていく指導法をとるものであったが、その目的が音楽的能力を重視したものであるために、前者に含めた。この結果からも、この時代は音楽的な成長・発達や音楽的能力が重視されていたこと、また昭和23年から昭和30年よりもさらに創造性を重視した音楽教育の考え方が出現してきたことが分かる。

③ 第3期：昭和39年から昭和63年

昭和37年頃から43年にかけては、「創造性を生かした」「自由表現と創造性」というように、幼児の「創造性」について書かれたものが多い。これは、昭和39年の『幼稚園教育要領』において、生活全体をとおして創造性を育てるということが大きな問題として取りあげられたことによるものと思われる。「音楽リズム」においても、内容の第4に「感じたこと、考えたことなどを音や動きに表現しよう」が挙げられ、またその指導上の留意点として「幼児の創造的な表現の芽ばえを培うようにすること」が挙げられている。

続いて、昭和44年から46年の3年間に、コダーイシステムやハンガリーの幼児音楽教育に関する記事が集中しており、昭和48年にはわらべうたが登場している。突然コダーイが登場した背景には、特定非営利活動法人コダーイ芸術教育研究所の設立があった。このコダーイ芸術教育研究所は、日本の音楽教育の変革を目的として、昭和43年に、ハンガリーでコダーイ理論を学んだ羽仁協子氏によって設立された。これは初めて記事にコダーイが取りあげられた前年である。日本のわらべうたを使った音楽教育を幼児教育の現場で具体的な実践として提示した結果、当時の就学前教育における音楽教育に大きな影響を及ぼし、急速に保育現場に浸透していったものと思われる。

その後昭和49年以降、音楽に関する記事は急激に減少している。昭和49年9号および昭和54年2号にそれぞれ1点ずつあるのみであり、昭和63年に至るまでの約15年間は音楽教育に対する関心が薄れていたことがわかる。昭和63年に記事が再び多くなるが、その内容から、平成元年の『幼稚園教育要領』の改訂を前に、「音楽リズム」についての見直しが行われ始めたことがうかがえる。

倉橋惣三の保育観が再評価されたことによって、昭和50年頃から既に、遊びの充実こそ幼児の心身の発達にとってもっとも望ましいこととして指導されるようになっていた。その後約10年にわたって、保育現場においてごっこ遊びなどの子どもの自主的な遊びの大切さ、そのための教師のあり方、環境整備の重視、仲間づくりを中心とした学級経営などが強調されるようになった。昭和63年に至るまでの約15年間に音楽教育に関する記事がほとんどないことは、以上のような背景があったからではないだろうか。

表3 昭和39年から昭和63年の『幼児の教育』に掲載された音楽に関する記事一覧

年	巻	号	音楽に関する記事	執筆者	所属機関	ページ	分類
1964	63	1	幼児と歌	岡弘美	(大学)	pp.50-53	□
		2	リズム教育における自由表現と創造性	"	"	pp.25-27	□
		6	新幼稚園教育要領について「音楽リズム」の領域について	安藤寿美江	東京都教育委員会指導主事	pp.18-21	その他
1965	64	10	幼稚園における歌唱の指導	玉井紀子	聖心女子学院幼稚園	pp.34-44	□
		3	5歳児の音楽リズム	関治子	(幼稚園)	pp.17-20	○
		9	幼児の好きな歌	清水美代子	自由学院短期大学	pp.45-51	○
		11	幼児の言葉とふしづけの即興表現	細矢静子	日本女子大学附属豊明幼稚園	pp.50-59	□
		8	リズムあそびと夏のあそびを中心として	森山美代子	島根県・大東幼稚園	pp.65-71	△
1966	65	12	幼児の言葉とふしづけの即興表現(2) - 3才児	細矢静子	日本女子大学附属豊明幼稚園	pp.54-63	□
		1	幼児の創造的活動の指導(上) 音楽リズムを中心として	岡田鈴代	四日市市立中幼稚園	pp.45-49	□
1967	66	7	☆幼児の芸術活動と人間形成	牛島義友		pp.2-5	△
			音楽教育と人間形成	瀬戸尊	文京区教育センター	pp.12-15	□
			幼児の芸術活動とはどういうものか	細矢静子	日本女子大学附属豊明幼稚園	pp.16-21	□
			幼児の創造性を伸ばすための音楽リズムの指導	田代廣子	松江市白波幼稚園	pp.22-27	□
			幼児における創造性の機能と育成	篠崎謙次	宇都宮大学	pp.28-35	□
		10	幼児期と旋律楽器	清水美代子	市郡短期大学	pp.29-37	○
		12	幼児の言葉と節づけの即興表現(3) - 4才児	細矢静子	日本女子大学附属豊明幼稚園	pp.36-47	□
		11	幼児と音楽	清水美代子	川村短期大学	pp.32-35	○
		12	世界の子どもうた	小泉丈夫		pp.2-19	その他
		1968	67	7	幼児と音楽(1)	松平立行	大阪教育大学
	幼児の音楽体験と創造的表現			江波諄子	お茶の水女子大学	pp.54-61	□
8	幼児と音楽(2)			松平立行	大阪教育大学	pp.53-58	△
9	幼児と音楽(3)			"	"	pp.43-48	△
11	幼児と音楽			大宮真琴	お茶の水女子大学	pp.6-15	□
1970	69	1	コダーイシステムと音楽教育	加勢るり子	コダーイシステム研究所	pp.38-46	その他
			コダーイシステムをめぐる討議	加勢るり子・津守貞		pp.47-51	その他
		7	ハンガリーの保育園<教材うた>	加勢るり子	コダーイシステム研究所	pp.64-65	その他
1971	70	9	音楽教育における MUSIC MAKING のこころみ	芝恭子	東洋英和女学院短期大学	pp.29-36	□
			講演 子どもとうた(コダーイシステム研究会の講演より)	時実利彦		pp.4-11	□
		3	座談会 幼児の音楽について	本田・堀合・関・加勢・津守・依田		pp.44-50	その他
1972	71	2	幼児の音楽教育(ハンガリー)	加勢るり子	コダーイシステム研究所	pp.40-51	その他
		7	幼稚園にのぞむこと - こどもに音楽の楽しさを一	古江綾子	お茶の水女子大学附属小学校	pp.12-16	□
1973	72	なし					
1974	73	2	幼児と音楽	清水光子	文京区音羽幼稚園	pp.14-17	□
			頭でっから、心寒々の幼児音楽教育 - ひが眼音楽教育論	服部公一	作曲家	pp.18-21	□
		4	子どもをもっている親と音楽	徳丸吉彦	国立音楽大学	p.28	その他
			幼児と音楽 "心から歌う"	相馬誠子	江戸川区立鹿本幼稚園	pp.29-32	△
			幼児と音楽	加勢るり子	コダーイシステム研究所	pp.15-18	△
		幼児の歌唱のうっぴかり	小林つや江	日本女子体育大学	pp.19-22	□	

		6	幼児と音楽	芝蒸子	東洋英和女学院短期大学	pp.25-28	□
		7	幼児のうたとあそび	小林つや江	日本女子体育大学	pp.16-22	△
		9	わらべうたの一考察	〃	〃	pp.56-64	□
		10	MUSIC MAKING *倉橋賞受賞論文	藤井清子・赤羽まり・丹羽輝子	東洋英和幼稚園	pp.44-50	□
1975	74	6	久保田芳子著 こどもとリズム リズム教育の理論と実際	山村きよ	聖徳学園短期大学	p.59	その他
		9	幼児と音楽	神礼子	聖マリアンナ医科大学ことばの治療室	pp.51-54	□
1976 ～ 1979	75 ～ 78		なし				
1980	79	2	音楽取調掛編纂「幼稚園唱歌集」における欧米幼稚園唱歌・学校唱歌のとり入れ方 *倉橋賞受賞論文	藤田英美子	国立音楽大学	pp.44-55	その他
1981 ～ 1988	80 ～ 87		なし				

* 分類…音楽的能力を重視したものを○、その中でも遊び形式での基礎的指導を重視したものを△、創造性や自由表現を重視したものを□、で示した。

表3にみられるように、この時代には45点の音楽に関する記事がみられた。そのうち、歴史、『幼稚園教育要領』、教材・著書の紹介、座談会、およびコダーイシステムやハンガリーの教育に関する記事を除き、連載記事をまとめて1点とカウントすると、就学前教育における音楽教育に関する記事は、31点存在する。この31点を内容から音楽的な成長・発達を重視した音楽教育と、創造性を伸ばすことを重視した音楽教育の2つに分類したところ、31点のうち9点が子どもの音楽的な成長・発達や音楽的能力を重視した音楽教育であり、残りの22点が子どもの創造性を伸ばすことを重視した音楽教育であった。創造性を伸ばすことを重視した音楽教育の割合が大きくなっているのは、昭和39年の『幼稚園教育要領』改訂において創造性が強調され、また50年頃から遊びの大切さが強調され始めたことによるものと思われる。前者においても、遊びの形式でという考えが半数を超えている。

④ 第4期：平成元年から平成9年

表4に示したとおり、平成元年から平成9年の間には、音楽に関する記事が16点みられた。そのうち5点は原口による連載であるために、記事としては12点であるが、その内容にはばらつきがあり、特にめだつ記事も存在しない。90巻（1991）以降は、歴史、外国の歌の紹介、障害のある子どもたちの音楽や音楽家による体験談が占めており、就学前教育における音楽教育に関して述べられた記事は94巻7号の高松の記事、および95巻2号の村山の記事のみである。この他に88巻5、7、8、10、12号の原口の記事、6号の吉成の記事、89巻12号の松井の記事を合わせて、就学前教育における音楽教育に関する記事は5点しか存在しない。

『幼稚園教育要領』の変遷上では、平成元年に子どもの自主性を重視した遊び中心の保育が打ち込まれたが、原口（1989）は改訂前に「理論上は大変好ましいことではあるが現実を見た場合この指導と方向づけの中で、子どもたちははたしてしっかりと成長を保障されているだろうか」「決まって与えられていた活動すらなくなり、伸び伸びと自主的の名のもとにいつそう貧弱な保育内容と生活経験しかもてずに修了しているということもありうる」¹⁰⁾としている。原口は遊び中心の保育を批判し、一斉活動としての指導を重視しているが、与えられたものとしてではなく子どもが自ら楽しむ中での基礎的な指導を実践している。

他4点の記事は、どれも子どもが自ら楽しむ音楽として遊びの中に取り入れていくこと、子どもの内面の成長を第一としたものばかりであり、はっきりと音楽的成長・発達や音楽的能力を重要視している記述はみられない。

表4 平成元年から平成9年の『幼児の教育』に掲載された音楽に関する記事一覧

年	巻	号	音楽に関する記事	執筆者	所属機関	ページ	分類
1989	88	5	子どもにとって楽しい音楽リズムのあり方を考える (1)	原口純子	つくば市立幼稚園	pp.44-49	△
		6	リズム遊び—戸倉ハルの作品を通して—	吉成啓子	白百合幼稚園	pp.37-47	□
		7	〃 (2)	原口純子	つくば市立幼稚園	pp.49-55	△
		8	〃 (3)	〃	〃	pp.50-55	△
		10	〃 (4)	〃	〃	pp.48-55	△
		12	〃 (5)	〃	〃	pp.44-51	△
1990	89	12	園庭より (8) 音楽	松井とし	神奈川県立教育センター	pp.20-21	□
1991	90	10	チェコ便り (10) こどものうた	大槻優子	〃	pp.43-48	その他
1992	91		なし				

1993	92	4	音楽の往来と子ども 東洋音楽学会からの報告	永原恵三	お茶の水女子大学	pp.11-19	その他
1994	93		なし				
1995	94	2	子どもたちへのまなざし (II) フラット オンクラシックミュージック	松井とし	元・幼稚園教諭	pp.52-53	その他
		7	音楽リズム・オン・ステージに参加して 保育者の自己変革を目指して 幼児教育から見たリトミック	小崎祥子 高松弥生子	共立女子学園大日坂幼稚園	pp.34-40 pp.50-56	その他 □
1996	95	2	教育における「音楽」の役割 —即興アンサンブルの試みを通して—	村山順吉	聖学院大学	pp.18-25	□
		3	遅れてきたおたまじゃくし —雑誌『婦人と子ども』の中の楽譜—	伊吹山真帆子	お茶の水女子大学女性文化研究センター	pp.12-20	その他
1997	96	1	初めてのオーケストラ	相葉武久	東京都交響楽団	pp.8-12	その他
		10	子どもたちの音楽の楽しみ方	山田陽子	愛育養護学校	pp.42-47	その他

* 分類…音楽的能力を重視したものを○、中でも遊び形式での基礎的指導を重視したものを△、創造性や自由表現を重視したものを□、で示した。

⑤ 平成10年以降

平成10年以降には、音楽に関する記事は平成10年に6点あるのみである。そのうち、5点は藤田による連載であるために、記事の内容としては2点のみと言えるが、97巻1号の津守の記事の内容は、障害のある大人の施設においての活動について書かれたものであり、音楽教育そのものについてではない。藤田による連載は、音楽を生活と結びつけ、子どもの遊びや生活の中にみられる音楽的行動に着目したものである。平成10年に改訂された『幼稚園教育要領』で、領域「表現」の「3 内容の取り扱い」の(2)において、幼児の素朴な表現を認め、幼児自身の表現しようとする意欲を受けとめることの大切さについて記述されている。この記事には、こうした生活の中で生まれる幼児の自然な音楽的行動を大切にしなければならないと主張されている。

表5 平成10年から平成17年に『幼児の教育』にみられる音楽に関する記事一覧

年	巻	号	音楽に関する記事	執筆者	所属機関	ページ	分類
1998	97	1	「音と動き」の場から	津守真		pp.26-30	その他
		4	子どもの生活と音楽 (1) 「数かぞえ」のバリエーション	藤田美美子	国立音楽大学	pp.6-15	□
		6	“(2) 周囲の音や音楽に注目し、探索する —0歳児クラスの子どもの音楽行動の観察から—	”	”	pp.6-15	□
		8	“(3) プール遊びに見られる音楽的な熱中	”	”	pp.4-12	□
		10	“(4) 子どもたちの周囲にある習慣的な音楽行動	”	”	pp.6-15	□
		12	“(5) 言葉遊び・歌遊びの世界	”	”	pp.34-43	□
1999 ~ 2005	98 ~ 104		なし				

* 分類…音楽的能力を重視したものを○、中でも遊び形式での基礎的指導を重視したものを△、創造性や自由表現を重視したものを□、で示した。

5 戦後の就学前教育における音楽教育の変遷と特質

本論文では『幼児の教育』から音楽に関する記事を取り上げて、戦後の就学前教育における音楽教育を概観してきたが、ここで再び、音楽的な成長・発達や音楽的能力の育成を重視した音楽教育と、自由表現を大切に子どもの創造性を伸ばすことを重視した音楽教育という2つの対立的な考えを視点として整理し、流れを検討する。ここで言う音楽的な成長・発達や音楽的能力とは、小学校への系統性を視野に入れたものとする。

これまで、『幼稚園教育要領』の改訂を区切りとして各時代の特徴を検討してきた。音楽に関する記事のうち、歴史、教材・著書の紹介、外国の音楽教育、研究協議、および座談会、音楽心理および音楽療法などといった分野の記事は除き、わが国の就学前教育における音楽教育に関する記事を、その内容から音楽的な成長・発達を重視した音楽教育と、子どもの創造性を伸ばすことを重視した音楽教育の2つに大別した。さらに、音楽的な成長・発達や音楽的能力を重視した音楽教育の中において、指導法については2つの立場がとられてきたことが明らかとなった。つまり、1. 音楽的な成長・発達や音楽的能力を第1として指導を行う音楽教育(○)、2. 遊びの中で基礎的な指導を行う音楽教育(△)、3. 自由表現を大切に子どもの創造性を伸ばすことを重視した音楽教育(□)、の3つの立場について分類を行ったところ、以下のような結果が得られた。図3に、これら3つの立場の『幼稚園教育要領』にもとづく時代ごとの割合の推移を示した。

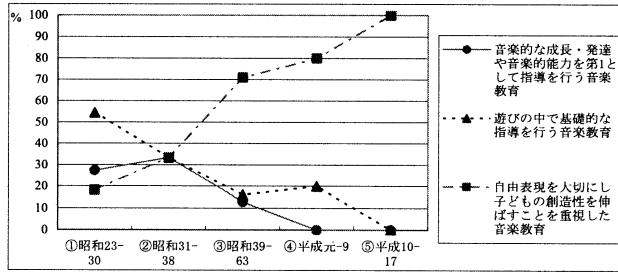


図3 『幼稚園教育要領』にもとづく時代ごとの『幼児の教育』にみられる3つの就学前音楽教育の立場の割合の推移

音楽的な成長・発達や音楽的能力の育成を重視した音楽教育(○・△)と、自由表現を大切にし、子どもの創造性を伸ばすことを重視した音楽教育(□)の2つの立場に関してみると、第1期(昭和23-30年)は音楽的な成長・発達を重視した音楽教育(○・△)が全体の約80%と、高い割合を占めているが、それ以降創造性を伸ばすことを重視した音楽教育(□)が徐々に増加していき、第2期(昭和31-39年)から第3期(昭和39-63年)の間において音楽的な成長・発達を重視した音楽教育を上回っている。

その後、創造性を伸ばすことを重視した音楽教育(□)の割合が増え続ける一方で、音楽的な成長・発達を重視した音楽教育(○・△)は姿を消していき、第5期(平成10-17年)ではついに0%となった。昭和39年の『幼稚園教育要領』の改訂で、創造性ということが強調されたことによって、また、平成元年の改訂で「音楽リズム」から「表現」領域への移行がなされ、遊び中心の保育が進められたことによって、創造性を重視した音楽教育が主流となっていったと考えられる。

音楽的成長・発達や音楽的能力の育成を第1として指導を行う音楽教育(○)と、遊びの中で基礎的な指導を行う音楽教育(△)に関する記事は、昭和52年までは常に存在していた。第1期(昭和23-30年)は、昭和23年の『保育要領』で打ちだされた「リズム」において、「唱歌遊び」および「リズム遊び」という項目が設けられたことによって、また、それまでの詰め込み式の音楽教育の反省によって、遊びの中で基礎的な指導を行うという考えが強調されたのであろう。続く第2期(昭和31-38年)には、遊びの中でという考えの割合が低くなっていく。これは昭和31年の『幼稚園教育要領』において小学校との一貫性を果たせることが強調されたことによって、領域を教科的なものと間違えてとらえられてしまった、という事実裏付けされる。その後第4期(平成元-9年)には、自由表現や創造性が重視されていくと同時に、一斉指導の形で保育者から子どもに教えるという従来の指導は姿を消していった。

以上のように、昭和23年から現在に至る過程において、音楽的な成長・発達を重視した音楽教育から、創造性を伸ばすことを重視する音楽教育へと変遷していったと言える。そして、その変遷の過程には『幼稚園教育要領』が大きな影響を及ぼしていた。昭和23年『保育要領』、昭和31年『幼稚園教育要領』、その後昭和39年、平成元年、および平成10年に改訂がなされてきたが、図3にはこれら『幼稚園教育要領』の改訂の意図がよく反映されている。また、音楽的な成長・発達を重視した音楽教育が約8割を占めていた第1期(昭和23-30年)頃から、創造性を伸ばすことを重視する考えがすでに存在しており、また、音楽的な成長・発達や音楽的能力を重視した音楽教育の中においても、音楽的成長・発達を第1として指導を行う音楽教育と、遊びの中で基礎的な指導を行う音楽教育の2つの立場によって、就学前教育における音楽教育は展開されてきたのである。

全体としては、以上のような流れがみられた。しかし、このような流れは、研究者の間においても現場の保育者の間においても同様にみられるものなのであろうか。対象とした記事の執筆者は、研究者47.1%、保育者33.8%、その他19.1%であった。

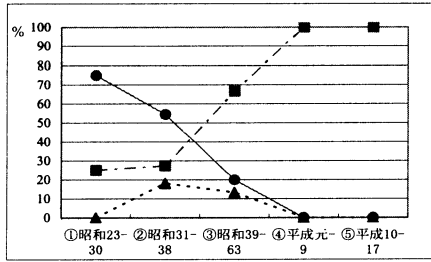


図4 『幼稚園教育要領』にもとづく時代ごとの研究者における3つの就学前音楽教育に対する立場の割合の推移

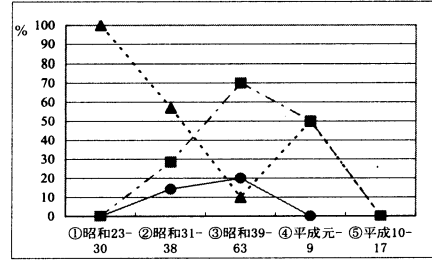


図5 『幼稚園教育要領』にもとづく時代ごとの保育者における3つの就学前音楽教育に対する立場の割合の推移

図4には研究者について、また図5には保育者について、それぞれ1. 音楽的な成長・発達や音楽的能力の育成を第1として指導を行う音楽教育(○)、2. 遊びの中で基礎的な指導を行う音楽教育(Δ)、3. 自由表現を大切にし、子どもの創造性を伸ばすことを重視した音楽教育(□)、の3つの考えの割合の推移を示した。図4および図5から、研究者についても、保育者についても、全体として、音楽的成長・発達を重視した音楽教育から創造性を伸ばすことを重視した音楽教育へという流れは同様にみられる。創造性を伸ばすことを重視した音楽教育が音楽的成長・発達を重視した音楽教育を上回る時期は、両者とも第2期(昭和31-38年)から第3期(昭和39-63年)の間であり、一致している。研究者および保育者について、その傾向が大きく異なっているのが、第1期(昭和23-30年)から第3期(昭和39-63年)の間においてである。創造性を伸ばすことを重視した音楽教育の割合が徐々に増加していき、音楽的成長・発達を重視した音楽教育の割合が減少していくという点においては同様の傾向がみられるが、音楽的成長・発達を重視した音楽教育における指導法の考えについて大きな差異がみられた。第1期(昭和31-38年)において、研究者は音楽的な成長・発達や音楽的能力の育成を第1として指導を行う音楽教育(○)の割合が高く、それに対して、保育者は遊びの中での基礎的な指導を行う音楽教育(Δ)の割合が圧倒的に高い。音楽的成長・発達が正しくなされることを目的として、教えるべきことは教えていかなければならないとする研究者に対し、保育現場で子どもと常に関わっている保育者は、未分化である子どもの実状を実感しているために、遊びの中で基礎的な指導を行っていくことをより重視していたと考えられる。したがって、保育者は、『幼稚園教育要領』の流れを受けつつも、それぞれ独自の考えのもとに音楽教育を展開していたと推測できる。

6 おわりに

本論文では『幼児の教育』だけを検討し、音楽に関する記事から就学前教育における音楽教育についてその変遷を概観してきた。しかし、おおまかな流れをみることはできたが、実際にどのような音楽教育が行われてきたかというところまでは明らかにすることができなかったために、今後は実践例について検討を重ねていきたい。さらに、戦後出版された就学前音楽教育に関する著書および研究論文から、戦後の就学前教育における音楽教育の変遷を明らかにしていく予定である。

引用・参考文献

- 1) 津守真「創刊100巻を記念して 私が『幼児の教育』誌の編集にたずさわった頃—1954年から1983年まで—」『幼児の教育』第100巻1号、日本幼稚園協会、2001、p.10
- 2) 小林宗作「リズムと教育(1)」『幼児の教育』第47巻5号、日本幼稚園協会、1948
小林宗作「リズムと教育(2)」『幼児の教育』第47巻6号、日本幼稚園協会、1948
- 3) 山下俊郎「幼児の音楽的発達」『幼児の教育』第49巻9号、日本幼稚園協会、1950、p.6
- 4) 小木曾光子「音遊び」『幼児の教育』第52巻9号、日本幼稚園協会、1953、p.46
- 5) 山村きよ「改訂された『音楽リズム指導書』にもとづいて」『幼児の教育』第52巻12号、1953
- 6) 戸倉ハル「幼児のリズム指導」『幼児の教育』第50巻1号、日本幼稚園協会、1951、p.31
- 7) 副島ハマ「リズム遊び」『幼児の教育』第47巻8号、日本幼稚園協会、1948、p.14

- 8) 文部省『幼稚園のための指導書 音楽リズム編』明治図書出版、1953、p.1
 - 9) 坂元彦太郎「「領域」の功罪とのぞましい活動の全貌」『幼児の教育』第54巻12号、1955、p.3
 - 10) 原口純子「子どもにとって楽しい音楽リズムのあり方を考える (1)」『幼児の教育』第88巻5号、日本幼稚園協会、1989、p.45
- 日本幼稚園協会編『幼児の教育』第47巻4号-104巻12号、日本幼稚園協会、1948-2005